

主日礼拝説教「『平和があるように』と挨拶する」予稿

日本基督教団石神井教会 2025年8月17日

【旧約聖書日課】ヨナ書 3章1～5節

¹主の言葉が再びヨナに臨んだ。²「さあ、大いなる都ニネベに行って、わたしがお前に語る言葉を告げよ。」

³ヨナは主の命令どおり、直ちにニネベに行った。ニネベは非常に大きな都で、一回りするのに三日かかった。⁴ヨナはまず都に入り、一日分の距離を歩きながら叫び、そして言った。

「あと四十日すれば、ニネベの都は滅びる。」

⁵すると、ニネベの人々は神を信じ、断食を呼びかけ、身分の高い者も低い者も身に粗布をまとった。

【使徒書日課】使徒言行録 9章26～31節

²⁶サウロはエルサレムに着き、弟子の仲間に加わろうとしたが、皆は彼を弟子だとは信じないで恐れた。²⁷しかしバルナバは、サウロを連れて使徒たちのところへ案内し、サウロが旅の途中で主に出会い、主に語りかけられ、ダマスコでイエスの名によって大胆に宣教した次第を説明した。²⁸それで、サウロはエルサレムで使徒たちと自由に行き来し、主の名によって恐れずに教えるようになった。²⁹また、ギリシア語を話すユダヤ人と語り、議論もしたが、彼らはサウロを殺そうとねらっていた。³⁰それを知った兄弟たちは、サウロを連れてカイサリアに下り、そこからタルソスへ出発させた。³¹こうして、教会はユダヤ、ガリラヤ、サマリアの全地方で平和を保ち、主を畏れ、聖霊の慰めを受け、基礎が固まって発展し、信者の数が増えていった。

【福音書日課】マタイによる福音書 9章35節～10章16節

9 ³⁵イエスは町や村を残らず回って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、ありとあらゆる病気や患いをいやされた。³⁶また、群衆が飼いきれない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた。³⁷そこで、弟子たちに言われた。「収穫は多いが、働き手が少ない。³⁸だから、収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主に願いなさい。」

10 ¹イエスは十二人の弟子を呼び寄せ、汚れた霊に対する権能をお授けになった。汚れた霊を追い出し、あらゆる病気や患いをいやすためであった。²十二使徒の名は次のとおりである。まずペトロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレ、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネ、³フィリポとバルトロマイ、トマスと徴税人のマタイ、アルファイの子ヤコブとタダイ、⁴熱心党のシモン、それにイエスを裏切ったイスカリオテのユダである。

⁵イエスはこの十二人を派遣するにあたり、次のように命じられた。「異邦人の道に行ってはならない。また、サマリア人の町に入ってはならない。⁶むしろ、イスラエルの家の失われた羊のところへ行きなさい。⁷行って、『天の国は近づいた』と宣べ伝えなさい。⁸病人をいやし、死者を生き返らせ、重い皮膚病を患っている人を清くし、悪霊を追い払いなさい。ただで受けたのだから、ただで与えなさい。⁹帯の中に金貨も銀貨も銅貨も入れて行ってはならない。¹⁰旅には袋も二枚の下着も、履物も杖も持って行ってはならない。働く者が食べ物を受けるのは当然である。¹¹町や村に入ったら、そこで、ふさわしい人はだれかをよく調べ、旅立つときまで、その人のもとにとどまりなさい。¹²その家に入ったら、『平和があるように』と挨拶しなさい。¹³家の人々がそれを受けるにふさわしければ、あなたがたの願う平和は彼らに与えられる。もし、ふさわしくなければ、その平和はあなたがたに返ってくる。¹⁴あなたがたを迎え入れもせず、あなたがたの言葉に耳を傾けようもしない者がいたら、その家や町を出て行くとき、足の埃を払い落としなさい。¹⁵はつきり言うておく。裁きの日には、この町よりもソドムやゴモラの地の方が軽い罰で済む。」

¹⁶「わたしはあなたがたを遣わす。それは、狼の群れに羊を送り込むようなものだ。だから、蛇のように賢く、鳩のように素直になりなさい。」

「平和があるように」【こども説教のために】

今日も、わたしたちは、「平和が実現しますように」と祈りを合わせる教会に集められて来ました。教会は、何よりも「平和」を求めて祈り、「平和」を実現するために共に歩みを始める者たちの集められて来るところです。

ここに集められて来たわたしたちは、互いに「**平和があるように**」と挨拶いたしましょう。主イエスは、弟子たちをお遣わしになられたとき、だれかの**家に入ったら、「平和があるように」と挨拶しなさい**、とお教えになられました。主イエスが、いつもそうなさっていたのでしょうか。「シャローム」と挨拶なさっていたのでしょうか。ユダヤの人の言葉、ヘブライ語で「平和」を意味する言葉「シャローム」は、挨拶の言葉です。アラビア語の「サラーム」も同じです。「シャローム」、「サラーム」、「平和があるように」と言って、互いに挨拶を交わしてきた人たちに、主イエスは、あらためて「挨拶しなさい」とお教えになられたのです。

わたしたちは、礼拝の中で「平和の挨拶」を交します。「キリストの平和」、「主の平和」、「シャローム」という言葉で挨拶します。もちろん、その言葉でなくても良いのです。言葉を口に出すことができないならば、他の方法で挨拶しても良いのです。目と目を合わせて、お辞儀をして、握手をして、わたしたちは、互いの間に「平和」を確かめる挨拶を交わすことができます。挨拶を交わしたとき、そこには「平和」が実現しているのです。

「天の国は近づいた」

戦後八十年となった今夏、各地で祈りの営みが重ねられると共に、テレビなどでもあらためて特別な番組が放送されていました。わたしが実際に視聴した番組は限られたものに過ぎませんが、今年はこれまでと比べても、かつての出来事を次世代に語り継ぐということをテーマにした番組が多くなったように思われました。確かに、八十年という時間は、一人の人の人生の時間そのものです。かつての戦争の時代の出来事を実体験としてお語りくださる方は、すでに限られています。そのような実体験を聞いてレポートをまとめるという課題を出されるキリスト教学校があって、以前から、教会の方を紹介するということをしてきましたが、紹介できる方も限られてきました。

語り継ぐ者がいなくなれば、間もなく、かつての出来事を語る者はいなくなってしまうことでしょう。歴史学者が正確な歴史として記述し、記録を残せばよいと考える者もあるかもしれませんが。けれども、それでは、出来事を経験した者の記憶の継承とは言えないでしょう。実体験を聞くのは、出来事の客観的な事実を知るためではないからです。そのとき、そこで一人の人が感じたこと、考えたこと、それによってその後の生き方に影響を与えたこと、などをひっくるめた、一人の人の記憶を聞こうとしているのです。そこに一人の人の人格があり、存在があるからです。そのような存在に触れ、人格に触れるためにこそ、人は、先人から聞いたことを語り継ぐという営みを大切にしてきたのでしょう。

主イエスが、ただ一人で宣教活動を始められたとき、用いられた宣教の言葉は、「悔い改めよ、**天の国は近づいた**」(マタイ 4:17) というものでした。それは、しかし、主イエスが独自に発案されたスローガンではありません。主イエスに洗礼を授けた洗礼者ヨハネが用いていた言葉なのです(同 3:2)。そして、主イエスは、その言葉を、弟子たちにも語り継がせました、「**行って、『天の国は近づいた』と宣べ伝えなさい**」と。

もちろん、この言葉だけを連呼していたわけではないでしょう。この言葉を受け継ぐことを通して、主イエスは洗礼者ヨハネの存在を受け継ぎ、弟子たちは主イエスの存在を受け継いだのです。洗礼者ヨハネが全生涯をかけて為そうとしたことを主イエスが受け継ぎ、主イエスが全生涯をかけてお示しになろうとされたことを弟子たちは受け継いだのです。教会は、その弟子たちから受け継いできました。主イエスの言葉を受け継ぎ、主イエスのご生涯、その命のすべてを受け継いできました。そのために、語り継いできました。語り継ぐ者として、受け継いだ命を自分自身のものとして生きてきたのです。先達が語り継ぎ、受け継いできたものを、わたしたちも聞き、受け継ぎ、そして、次に続く者たちに語り継ごうとしているのです。

わたしたちの願う平和

米露の大統領が六年ぶりに対面で会談を行ったことが、大きな話題となっていました。国同士の元首や首脳が直接対面で会うとき、その内容もさることながら、どのように互いに迎え、挨拶し、振る舞い、そして別れるかというようなことが注目されます。それが、個人の関係にとどまらず、国同士の関係を象徴することとして理解されるからです。

人間は、太古の昔から、そのようなところに相互の関係の有様を見てきたのでしょう。どのようにお互いを迎え入れ、挨拶を交わし、もてなし、送り出すのか。その際に発せられる言葉のニュアンス、所作振る舞いなど、すべてがその関係性を物語っているのです。

そのようなことは、社会や文化に関係なく人類に共通する部分が少なくないのでしょう。他方で、言葉や所作振る舞いが意味することは、言語や社会の違いによって大きく異なることもあるでしょう。いいえ、同じ言語を用い、同じ社会に生きていると思っていても、ときには、互いに全く異なる意味で理解してしまっていることもあるのです。学校や教会、職場のように小さな同質に見える社会の中でさえ、わたしたちは、しばしば互いの言葉遣いを誤解し、所作振る舞いの意味を間違って理解してしまうことがあります。

そうであればこそ、わたしたちは、互いの関係の入口で信頼関係を築くことが、どうしても必要です。お互いを、最後には悪意ではなく善意で受け入れ合える相手だと認め合えれば、わたしたちは、一時の誤解や仲違いが生じたとしても、それを乗り越えて関係を修復することができるのです。

「**その家に入ったら、『平和があるように』と挨拶しなさい**」。そこから始まる関係を築くようにと、主はおっしゃいます。当たり前のことのようですが、それができていないから、主はそうおっしゃられたのでしょう。いいえ、実際、これは、決して簡単なことではないのです。わたしたちの生きる世界には、自分が挨拶する人と、挨拶しない人の、二種類の人しかいませんが、後者が圧倒的に多いのです。教会でさえ、そうではないでしょうか。

教会へと招き集められてきたわたしたちは、神の御前に集められた者たちとして、神の恵みにより赦された者たちとして、互いを受け入れ合い、互いを神の子らとして認め合い、共に生きていくように、教えられています。その第一歩として、わたしたちは、互いに挨拶を交わすのです、「平和があるように」と。わたしたちが願う平和が、挨拶を交わす相手にもあるようにと、挨拶を交わすのです。たとえ受け入れてもらえないときにも、そうするのです。そうだったとしても、わたしたちの平和が失われるわけではないのです。

わたしたちの平和を願う挨拶は、続けられるでしょう。それは、弟子たちの教会を通して主イエスから受け継いできたことなのです。